

さはこ

「ブランド」

校長 二瓶 晃一

今から二十年以上前である。私は湯本高校に出張で一度だけ来たことがある。その時の光景を今でも鮮明に覚えている。

それは生徒が活き活きと部活動をしていたことだ。

吹奏楽部の生徒は体育館脇や通路で各々が演奏の練習をしている。その人数も半端でない。校庭では野球部が激しく動き回っている。反対側ではサッカー部もボールを追っている。その間をソフトボール部や陸上部が狭い所で練習をしている。

当時私が勤務していた学校も八百人以上の生徒がいたが、湯本高校の生徒たちの活気にはかなわないな、と感じた。まさか二十数年後に、そんな湯本高校に私が勤務することになるとは思いもよらなかった。

当時は部活動での生徒の活気にばかり目を奪われていたが、進学においても実績を上げている。

例えば昭和の時代には進学において国公立大学では、福島大学や千葉大学を始め二けたの人数の国公立大学合格者を出している。私立大学においても、明治大学や法政大学に二けたの人数の合格者を出している。日本大学にはなんと六十三名もの合格者を出している。そのころ発行の「進学だより」には、「質・量ともに県内有数の進学校となった。」とある。

まさに、湯本高校は文武両道を実践する学校なのである。

そしてこの湯本高校の卒業生たちが、社会から高い評価を受けないはずはない。

湯本高校五十年史によると次のような記述がある。少々長いが引用したい。

一方で多くの卒業生たちの実社会における着実な活動が、盤石の重みとなって、高い評価を受けている。それは、進路指導室に求人に見えるかたのことばの中にはつきりと確認することができる。地元はいうまでもなく、遠く首都圏の企業からみえる人のことばの中にそれを聞くこともある。直接ではないのですが、大学を出たかた（本校の卒業生で）といういい方で、卒業生の活躍を聞くことが多い。虚名ではなく、一人一人の卒業生たちの活躍によって認知されている学校、これが湯本高校であると思う。

湯本高校は文武両道を実践し卒業生も社会から高い評価を受けてきた。それは今まで本校で学んだ一人ひとりの生徒たちが、学校の価値を高める担い手となっていたからである。おそらく今後も一人ひとりの生徒が価値を高める担い手となってくれるだろう。

それは今年卒業する生徒の皆さんにもいえることだ。

皆さんは湯本高校のブランドを高める担い手である。